

④自閉症者援助技術

課題:自閉症における問題行動を「冰山モデルの概観」を基本として、問題解決に至るプロセスの現状・仮説・結果にまとめ論述しなさい。

自閉症の問題行動の捉え方はよく「冰山モデル」に例えられる。冰山は、海面下の大部分が隠れている。この隠れた部分が原因となる部分で、海上に出ている一部分が問題行動として表に表れる行動である。海上に出ている部分を小さくしようと思ったら、隠れた大部分を小さくしなければならない。TEACCH プログラムでの「冰山モデル」とは、自閉症における問題行動を減らしていこうとする場合、隠れた原因の部分を無くしていかないと解決しないという概念である。

自閉症は認知（物事を知覚し、記憶し、試行し、計画する能力）障害であるので、入ってきた情報をうまく処理できない。そのため、適切な行動ができなかったり、問題が生じたりする。また、様々な合併症を持っていることが多く、例えば、うつ、ADHD、トゥレット障害、てんかん、強迫性障害等が該当するが、これらの障害と自閉症の特性を踏まえた視点から支援が必要となってくる。

問題行動が起きた時、まず支援員が行ってしまいがちなのが、行動を無理やり止める、注意する、叱ることである。本人もいったんは、やめる様子を見せるものの、時を置かずして再び同じ行動を起こし、さらには支援員の制止を振り切ってでもやり遂げようとする。こだわりについては、悪いこと・やめさせなければという思いから止めようとするも、逆にこだわりを悪化させてしまうこともある。逆に、自己

決定や自己選択という理由で、行動を全て許容し、時にはケガや本人の健康を害することに繋がることもある。これらの行動に対して、現場に立ち会った支援員は日々の記録やミーティング等で他の支援員との共有を図る。しかし、行動のみがピックアップされ、一支援員の主観や場当たりの対応を共有してしまう。そのことにより利用者はストレスや混乱を生じ、誤学習や失敗体験を増大させ、結果的に問題行動を悪化・固着化させてしまう。問題行動を解決に導くためには、まず客観的で継続した記録をとり、情報を共有する。次に記録と評価に基づく分析と検討による仮説立てをし、対応計画の立案をする。そして、対応の統一化や構造化等の環境設定をおこなうことにより、ストレスや混乱が減り、やるべき事が明確になり問題行動が解決へと導かれる。

仮説立てでは、問題行動の裏側にある可能性を探ってみる必要がある。その際、自閉症の特性を理解していなければならない。例えば、段ボール箱についてるテープを剥がすこだわりがあり、普段ない場所に置いてあるのを見つけて剥がし始めた。納品する段ボールなので大声で止めると、突然ガラスに向かって走り出し、蹴って割ってしまった。この行動で考えられるのは、テープを剥がしても「いい箱」と「ダメな箱」の区別がついていない、普段無い場所にあつたので気になってしまった、自分では悪いことをしているつもりは無いのに止められて混乱した等、様々な要素が浮かんで

くる。特に本人が話すことができ、返事もする場合、本人へのアプローチは言葉中心となりがちだが、特に本人が興奮している時等に聴覚と視覚どちらが優位かを再認識することも重要である。

上記のような仮説が立つとすれば、それらに対して支援員が有効な対応をとることによって問題となる行動を未然に防ぐことができるのではないだろうか。まず、環境設定をし、本人が気になる物や配置に関しては、「段ボール箱のテープは剥がさない」というルールを設定し、写真や文字掲示にて本人と事前に確認をする。大前提ではあるが、本人の能力や状態、障害特性を把握し直し、日中活動のプログラムの再検討をする。そして、できたことに対しての評価を必ず行い、肯定的に行動を認めていく。これらを本人と対する支援員、

そして施設全体が理解し、統一して支援していくことが重要になる。また、家庭との連携を図り、情報を共有することで家庭と施設との溝を無くすことも大切である。

結果、本人とストレス・混乱を軽減し、評価され行動を肯定的に捉えられることによって、やるべき事が明確になる。また、何を期待されているのかも理解してもらいやすくなる。掲示等視覚的・具体的に示すことで、本人の理解も増し、受け入れやすくなり、問題行動も減少していくのではないだろうか。

問題行動はとかく、否定的に捉えられ、起こした人の存在自体をも否定されてしまうこともある。私たち人間は存在を認められることを生きる糧としている。これは、自閉症を持つ障害者も、支援者も同じではないだろうか。

講評:・要点が大変よくまとめられたレポートです。

まとめに書かれている、「私たち人間は存在を認められることを生きる糧としている」という文章に共感します。